

ただ

いてくれる

だけで

嬉しいのだ

東 義方

『2026年難波別院カレンダー』11月のことば

掲示板のことば

問題に直面したとき、初めて色々な方向に目が向き、新たな発見をしたり、当たり前にあったものの大切さに気付いたりすることがあります。

以前、知人がこんなお話をしてくれました。その知人が仕事で辛い状況だったとき、その方のご主人は無理に事情を聞き出すことはせず、普段と変わらない空気を作ってくれたり、いつものお出かけの延長でリフレッシュできるような場所に誘ってくれたりしたそうです。さりげない優しさで、ただ側で寄り添っていてくれたことが、その知人にとって大きな支えとなり、救われたのだと話してくれました。

問題そのものは解決で

きていなくても、心が軽くなっていた体験は、その瞬間だけの安らぎではなく、時間が経っても心に残り続けて自分を支えてくれる「素」になるように思います。

私に寄り添ってくださるその存在は、人に限りません。本の言葉や目にした景色、新しい出会いや過去の出会い、あるいはお経の一節など様々で、身の回りの何気ないことにあらためて意識を傾けることでその大切さに気付かされるのでしょうか。

そしてさらに、自身の内面に目を向けることで、私たちの思い至らないところで常に支え寄り添ってくださる存在を再認識できたとき、ありがたさと心強さを感じられるのだと思います。

(大阪教区教化センター)

今月のことば

如来興世の本意には

本願真実ひらきてぞ

難値難見ときたま

猶霊瑞華としめしける

います。

お釈迦様は「老病死」の苦しみに出会うことで仏陀となる歩みを始められました。このことはお釈迦様も私たちと同じように、生きていく中での苦しみや悩みを常に抱えていたということなのだと思えます。

私たちがこの世にうまく生きること、そして死を迎えることは、自分の力や意志ではどうすることもできないことです。日々の生活や社会では、思い通りにならないことは多々ありますが、その最たるものが「生と死」についてではないでしょうか。

しかし私たちはその生と死について、日常の中

で真剣にじっくりと考え、機会是非常に少ないように感じます。それは目の先のことや将来のことなど、常に「先がある」ということを前提として生活しているからだと思います。

そのような私たちが、今生きている尊さや、いつか迎えるであろう自らの死と向き合うことができる機会の一つに、「大切な人の死」があります。自分にとって近しく、とても大切な人の死の前に立たされた時、私自身や周りにいてくれる人たちが、生きてそばにいてくれることが決して当たり前ではないということに気づかされます。そして、頭では理解できていたつもりのことでも、自分のこととなった瞬間、自身が無意識に「当たり前前」を作り上げてしまっていたことによりやく気づいていけるのではないのでしょうか。

このご和讃は、その見がたく遇いがたい大切なことに気づくことの尊さと有難さをおしえてくださっているように思えます。そしてその大切な気づきすら忘れてしまうような我が身であることに気づかされていくことも、この世に生まれた大切な意味と出遇うためのきっかけとなるのではないかと思います。

(奥田 我聞)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 483頁

(第二版) 578頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 129頁

このご和讃を私なりの言葉で受けとめてみますと、

お釈迦様がこの世に現れた本来の意味は、阿弥陀仏の本願が真実であると説き開くためです。この教え(本願)に出遇い、気づくことは、奇跡的なほど稀なことであり、それは数千年に一度しか咲かない霊瑞華が咲くことほど尊いことを示しています。

というようにいただいて

「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「お念仏」ってなあに？



「迷いの世に、光さす“声”」

大阪市 即應寺 藤井 真隆

お念仏とは一体何でありますか、とこう問われますれば、私は何時でもそれは、自分を発見する場所であると答えるのであります。

——金子大榮——

私たちは、仏さまを想い合掌する時、「南無阿弥陀仏」と口に称えてお念仏を申します。およそ浄土真宗の伝統に身を置く人で、お念仏を申されぬ方はおられないでしょう。ただ、そんな身近で大切なお念仏も、現代では、

「自分の心を少し慰めてくれるもの」、または「願い事を叶えるための呪文」などと受け取られ、一言で「念仏申す」とは言っても、お念仏の「ほんとう」がただだかれているかといえ、その真意は見失われつつあるようです。

念仏は文字通り、「仏のお心を想い念ずる歩み」です。蓮如上人が『口先で念仏していたらいいと思っているなら大きな誤りだ』と戒められたのも、その念仏を通して「南無

阿弥陀仏のいわれ」をよく聞き、自らの身を明らかにすることを大切にされたからでしょう。

例えば、私たちは日々、過去の後悔や未来への不安に悩まされ、「アイツが悪い」「コイツが悪い」と

心穏やかな時なく生きています。そんな満ち足りぬ私の有様を仏はかねてから見通し、その苦悩から解き放ち、安らぎのいのちの世界（浄土）へと私たちを喚び返そうと願い立たれたのが「南無阿弥陀仏のいわれ」でありました。

念仏は、私たちが口に称えるものではありませんが、それがそのまま阿弥陀仏が私たちを案じ、励まし、喚び返す声であります。怯える私に『いか

なる人生にも私が共にいる。今ここにいただく本来のあなた自身に立ち帰り、その身を喜んで生きてくれよ』と、この私と一つとなり、手を取りに来る声が南無阿弥陀仏です。

この南無阿弥陀仏に支えられ、目覚めさせられた無数の念仏者たちが、幾度となく苦悩する人生から立ち上がり、自らのいのちに大いなる意味を見出し、自分の人生に合掌していける自己へと育てられてゆかれたのです。

『あなたはあなたであることが大事、その命を輝かせて生きよ』との切なる願いに喚び覚まされ、初々しい自分を回復してゆく歩みこそ、真宗門徒の念仏生活であります。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈256〉

